

証真伝に於ける法然の存在

瀧川 善海

在世が天承元年から承久二年（一一三一—一一三〇）に収まると思われる叡山の總学頭証真と浄土宗の祖法然（一一三一—一二二二）は相同時に一生を送った学匠で、その交渉も主に浄土宗の史料から多少伝えられている。即ち、証真が大原談義に参会した事、戒律の相承に於ける証真と法然の関係、法然に感化された証真が往生伝を著した事の三点である。

証真の大原談義参会を記す最初は、最初期の法然伝である『源空私日記』で、以下『四巻伝』『増上寺本』『弘願本』等諸伝皆これに習っている。しかし、『私日記』同様初期の成立とされる『醍醐本』諸本を総括し且つ鎮西派の色彩の濃い『四十八巻伝』宗外からの談義見聞である『沙石集』等には大原談義の史実は認めつつもそこに証真の名を記さない。殊に、鎮西派祖弁長は寿永二年（一一八三）から大原談義の文治二年（一一八六）を経て法然に師事する建久八年（一一九七）迄証真の座下であり、自ら『末代念仏授手印』に「四教三觀之明鏡受相伝証真法印。三心五念之宝玉伝稟承源空上人。」³³と言ひ、『念仏名義集』でも「本山ニ人々多ケレトモ年来ノ間契リ有人ハ証真宝地房法印也……彼法印ノ許ニテ天台宗ノ法門ヲ習ハレタレハ……」³⁴とし、『念仏三心要集』にも同文を引いて証真との関りを記しているのであるから、『四十八巻伝』に証真の名を記載し

ないのは不自然である。但し、同じ舜昌撰の『九巻伝』は『私日記』に準じて証真の名を記しており、密接な関係にあると言われる両書が符合しないのも疑問である。傍、大原談義の質疑内容については伝聖覚の『聞書鈔』に伝えられており、十二問答中の第七に「証真問曰此宗習不許此土入聖得果何云現世証入哉。上人答曰此事誠可思之但草提布夫人於第七觀時得大悟無生和尚釈之証得往生云云此即最上利根人信知他力本願之利現世証得往生也往生者即無生也此義重可思之」とある。証真と聖覚は建仁元年（一一〇一）の法華五種行等で接觸があり、聖覚の父澄意との関係、聖覚の『四十八願釈』の証真引用等からある程度の交渉が認められる。しかし、『聞書鈔』は貞安の四失以来真偽が論ぜられ、現在は偽撰説が粗定説で、殊に南都明遍と貞慶については大原参会の可能法が極めて薄いとされている。又、証真の浄土教学には現存本で参照する限り大きな特色はなく、他力本願に関しては全く触れず、入証得果については安養浄土が同居土である事を『往生論』を引き「仏地論」と『摂論』を会して「既有未証。生彼始悟。故知後見報仏土也。」とするだけである。法然についても「浄土初学鈔」で「十疑論者。專為勸進往生極樂作之。然者為往生者雖本宗人学此十疑文可学念仏法門也非私意患心御意也。」とするが、証真は『玄義私記』で「且如極樂十疑等。非是天台所出。而和漢皆云大師説。彼引唐訳雜集論。故定非隋時之所述也。又引世親師子覺事。」と「十疑論」を偽撰としており、更に証真門下隆真は「選択集」批判を行なっていて、両者の間に教学上の接点を見出すことはできない。しかし、相方共互いに否定する事もなく、良忠や聖罔、聖聰等はその著書に『私記』や『疏鈔』をかなり引用しており、弁長の法然入室の動機を

『疑問鈔』では「上人御事故法印被奉讃之事思出始參東山御菴室」と伝え、『醍醐本』には「法印云……彼上人於我宗已為達者剃亙諸宗普習學智恵甚深超過常人……上人聞此事云彼法印殊親近奉談法門故知智恵分涯如此云也。」との伝説が残っている。大原談義は古来多くの脚色を含んで伝承されているが、それが『沙石集』に「小原ノ僧正四十八日ノ間往生要集ノ談義セサセ給ケリ」と言う程の規模で、教学上の主張を北嶺に宣説する意図のものとして扱えれば、両者が教学面で接点が無いとしても証真が大原に参会した事を否定する事はできないだろう。

次に、『四十八巻伝』に山僧の質疑に法然が答えざるを証真が不足言の疑として法然を讃嘆する段で「……ことに戒の法門は上人に相承の人なり……往生伝をつくりて我身をかきいれられけるとかや。」と証真の法然からの受戒と往生伝の著述について記されている。『四十八巻伝』のこの部分は『醍醐本』の継承である事は明らかで他の諸伝には記載がないが、『醍醐本』では「……殊に我法門者相承源空云事顯然也。」とするだけであり、本書それ自体にしても『私日記』に比べて宗意識が強いとされている。証真受戒の師については、江戸期の『本朝高僧伝』や『浄土伝燈總系符』は『四十八巻伝』をそのまま継承するが、既に弁長が『念仏名義集』で「彼法印ハ故黒谷慈眼房釈空上人ノ菩薩戒ノ弟子也。」とし、『念仏三心要集』でも同様に記している。江戸期妙瑞の『徹選釈集私志記』等でもこの説を採っている以上、証真受戒の師は釈空で法然とは同朋であるとするのが妥当であろう。又、往生伝の述作については大原談義と円戒受戒による証真の法然帰依の延長線上に描かれた伝説で、『蓮門類聚経籍録』『浄土真宗教典志』に始めて「今撰往生伝」

或いは『新撰往生伝』の名を見るが、『翼賛』には「法印ノソツクル往生伝世ニ流布ナシ 亡ケルニヤ 或山家者モ所見ナシトイヘリ一書ニ今撰往生伝一卷証真法印ノ作トイヘリ」と言う。但、本家七家往生伝として証真の往生伝をこれに含み、他六本の所在が明らかである以上これを無碍に否定はできないが、前の史料の信憑性や証真の行業教学から見て可能性は薄いと言わねばならない。

この様に、実際の両者の関係は天台というセクトの中で円戒受戒の同門としてのみ扱えるべきで、証真が大原に参会したとしてもそれは後世浄土家が言う様な法然帰依に結びつくものではなく、當時を代表する二者が偶々大原での談義で会したという程の意味で理解されるべきものであると思う。

- 1 拙稿「宝地房証真の生没年について」天台学报24。
- 2 田村円澄氏「法然伝の史的考察」仏教史学2。
- 3 浄全十七87頁。
- 4 三田全信氏「法然上人伝の成立的研究」仏教論叢11。
- 5 高橋正隆氏「法然上人行状絵図成立の事情について」大谷学报38。
- 6 浄全十一頁。
- 7 同374頁。
- 8 浄全十四764頁。
- 9 座主記三、門葉記八九。
- 10 澄憲六月会立義題者表曰(天台霞標六一二)。
- 11 今岡達音氏「大原談義」宗教界9 小西存祐氏「大原談義聞書鈔について」専修学报5 千賀真順氏「大原問答及び聞書鈔について」仏大研究紀要48。
- 12 天全玄四91頁。
- 13 新法全83頁。
- 14 天全玄三479頁。
- 15 日本大師先德明匠記。
- 16 念仏選擇評卷一。
- 17 浄全十29頁。
- 18 法然上人伝の成立史的研究一34頁。
- 19 岩波日本古典文学大系193頁。
- 20 浄全十六60頁。
- 21 同90頁。

(大正大学大学院)